日本経済論　　16．4．26

－日本の景気循環と景気判断　　（安孫子）

1．景気の山と谷

・景気とは？（かなり雰囲気によるもの？）：好景気と不景気（循環のパターン）

　― 好景気のときは需要が強い（一般に経済成長率、物価上昇率や金利が高く、失業率は低い）。
　　⇔ 不景気のときは需要が弱い（上記は一般に逆）

・景気動向指数研究会（景気基準日付検討委員会を改称）が事後的に判定

　― 景気の「山」と「谷」を月単位で特定：戦後の景気循環は以下のとおり。

　（詳細は内閣府のサイト http://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/di/011221hiduke.html を参照）

　①**山 1951/6**→谷 51/10、②谷→**山 54/1**→谷 54/11、③谷→**山 57/6**→谷 58/6、④谷→**山 61/12**→谷 62/10、⑤谷→**山 64/10**→谷 65/10、⑥谷→**山 70/7**→谷 71/12、⑦谷→**山 73/11**→谷 75/3、⑧谷→**山 77/1**→谷 77/10、⑨谷→**山 80/2**→谷 83/2、⑩谷→**山 85/6**→谷 86/11、⑪谷→**山 91/2**→谷 93/10、⑫谷→**山 97/5**→谷 99/1、⑬谷→**山(00/10)**→谷(02/01)、⑭谷→？

　― サイクルの期間は区々：拡張期は 21～57 か月、後退期は 4～36 か月、全循環は 37～84 か月

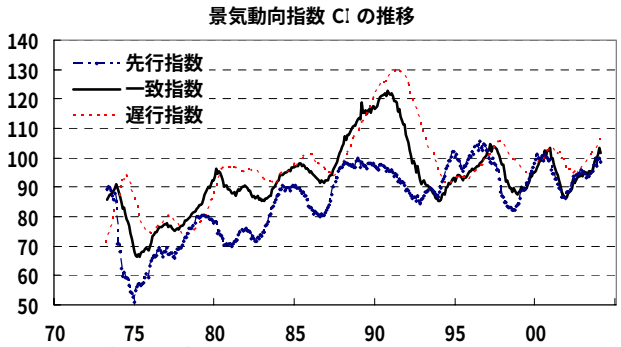
2．景気動向指数（C．I．およびD．I．）の推移

　― 詳細は、内閣府ホームページの解説（http://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/di/di3.html）を参照

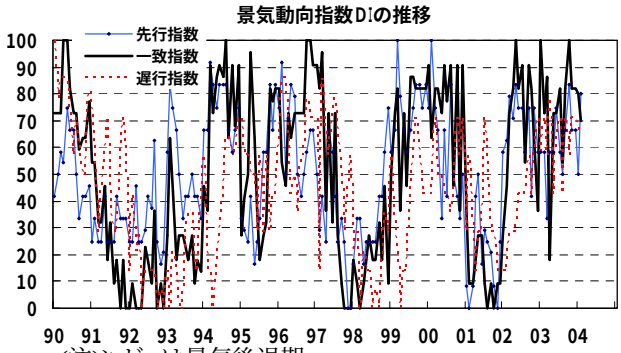
・景気に関する経済指標を集大成して、先行指数（現在は 12 系列）、一致指数（同 11 系列）、遅行指数（同 7 系列）を作成

・２つの指標：C.I.（ｺﾝﾎﾟｼﾞｯﾄ･ｲﾝﾃﾞｯｸｽ）と D.I.（ﾃﾞｨﾌｭｰｼﾞｮﾝ･ｲﾝﾃﾞｯｸｽ）

　― 変化率を合成して量感を把握する C.I.　⇔　変化方向を示した D.I.（拡張系列数の比率）
　　月々の振れは概して小さい　　月々の振れがかなり大きい



(注)ｼｬﾄﾞｰは景気後退期



(注)ｼｬﾄﾞｰは景気後退期

3．景気循環の主なサイクル論

・キチン循環（在庫投資中心の短いサイクル）、ジュグラー循環（設備投資中心の９～１０年のサイクル）、コンドラチェフ循環（技術革新に関連？）など

・「リアル・ビジネス・サイクル」の議論

4．日本の主な景気判断

・**月例経済報告**（政府の経済判断＜関係省庁で調整済み＞、景気の基調に対する判断、特有の表現）

・**政府経済見通し**：具体的な計数を提示、税収見通しなどの基礎、経済政策論議の中で注目される

・日本銀行の景気判断等：**金融経済月報**、政策委員の経済・物価に対する見通し、支店別の景気判断

・国際機関（IMF、OECD 等）の経済見通し

・国内研究機関（各種シンクタンク）の経済見通し

以上